

理論・研究・実践を総合する リフレクション

現在、看護の方向性として看護実践能力の向上が強調されている。そのためには看護者が臨床でどのように考え、判断しているのかといった考える力を涵養するような教育が重要である。リフレクションは、そのような看護実践の基盤となる科学的問題解決思考を含む思考の仕方であり、看護者が直面する複雑で多様な問題に対応する力となることで注目されている。リフレクションという概念は複雑であり、統一した定義がない一方で、リフレクションの看護教育への導入は、すでに欧州では一般的となっている(PubMedで文献検索を行なうと「reflection」AND「nursing education」で486件のヒットがある)。わが国でも、リフレクションは内省、省察、反省という言葉と互換性をもち、教師教育の分野で広く浸透している。看護教育においてもリフレクションに関連する文献を散見するようになった。

しかし、研究的視点でリフレクションの文献を検討すると、リフレクションは看護実践や看護教育とどう関連するのか、リフレクションは思考の仕方が学習の仕方が、リフレクションは看護実践や看護教育にどのように、どのような方法で活用するか、それによる成果は何か、実践に埋め込まれた理論はどのようなものなのかなど、リフレクションの研究においては、概念整理から研究方法、実践方法にわたり多くの検討事項がある。

そこで本焦点では、「リフレクションは誰もががしている思考であり、これを看護実践における知の探究に活用することで、看護実践の質の向上につながる」という前提に立って、リフレクションの理論と実践を検討する。

まず、リフレクションという思考の基盤理論の理解をするために、リフレクションの基本的概念を整理し、看護実践のなかに埋め込まれている理論(theory-in-use)として理解することをめざした。次に、理論は使ってこそ意味があるという考え方に立ち、筆者らのリフレクションを活用した教育実践例から、リフレクションを学習モデルとして創造すること、そして学習の方法として位置づけることをめざした。そして看護実践を、ひと(患者・当事者)とひと(看護師)とが相互関係のなかで織りなすダイナミックで動的なシステムであるという立場から知の探究をめざし、①看護師の実践をひも解く、②現任教育でのリフレクション学習から探究する2つの研究事例を提示した。

本特集が看護における理論と実践とその間にある研究とのギャップを埋めることに少しでも役立つことを期待する。

(企画：田村由美 神戸大学大学院保健学研究科教授)